

上野殿御返事

弘安元年四月一日 五七歳

白米一斗・いも一駄だ 弱 弱・こんにやく五枚おわ・わざと送り給ひ候ひ了んぬ。

なによりも石河ひょうえの兵衛入道殿のひめ御前の度々御ふみをつかはしたりしが、三月の十四・五夜 気のやげにて候ひしやらむ、御ふみありき。この世の中をみ候に、病なき人も今こねんなどを年すぐべしともみえ候はぬ上へ、もとより病ものにて候が、すでに急きうになりて候、さいごの御ふみ也とかゝれて候ひしが、されば終つゐにはかなくならせ給ひぬるか。

臨終に南無阿弥陀仏と申しあはせて候人は、仏の金言なれば一定の往生とこそ人も我も存じ候へ。しかれどもいかなる事にてや候ひけん。仏の悔くひかへさせ給ひて、未顕眞実正直捨方便説ととかせ給ひて候があさましく候ぞ。此を日蓮が申し候へば、そら事うわのそらなりと日本国には瞞いかられ候。此のみならず、仏の小乗経には十方に仏なし、一切衆生に仏性なしと説とかれて候へども、大乘経には十方に仏まします、一切衆生に仏性ありと説とかれて候へば、たれか小乗経を用ひ候。皆大乘経をこそ信じ候へ。此のみならず、不可思議 違 目ふかしぎのちがひめども候ぞかし。法華経は釈迦仏、已今当の経々を皆くひかへし悔 返 打ちやぶ破りて、此の経のみ眞実なりと説とかせ給ひて候ひしかば、御弟子等用うる事なし。爾の時多宝仏証明をくわへ、十方の諸仏舌を梵天につけ給ひき。さて多宝仏はとびらをたて、十方の諸仏は本土にかへらせ給ひて後は、いかなる経々ありて法華経を釈迦仏やぶらせ給ふとも、他人和 会わゑになりてやぶりがたし。しかれば法華経已後の経々、普賢経・涅槃経等には法華経を讚 謗ばほむる事はあれどもそしる事なし。而るを眞言宗の善無畏等、禅宗の祖師等此をやぶり、日本国みな皆此の事を信じぬ。例せば将門・貞任まさかど さだとうなどにかたらはれし人々のごとし。日本国すでに釈迦・多宝・十方の仏の大怨敵となりて数年になり候へば、やうやく破やぶれゆくほどに、又、かう申す者を御あだみあり、わざわひに禍わざわひの並ならべるゆえに、此の国土すでに天の責せめをかほり候はんずるぞ。

此の人の先世の宿業か、いかなる事ぞ臨終に南無妙法蓮華経と唱へさせ給ひける事は、一眼亀 ぶ 目 くのかめの浮木の穴に入り、天より下すいと糸 針の大地のはりの穴に入るがごとし。あらふしぎあらふしぎ。又念仏は無間地獄に墮つると申す事をば、経文に分明なるを知ばしらずして、皆人日蓮が口より出でたりとおもへり。文は瞋 毛まつげのごとしと申すはこれなり。虚空の遠きと、瞋 毛まつげの近きと人見みなみる事なきなり。此の尼御前は日蓮が法門だに僻ひが

事に候はゞ、よも臨終には正念には住し候はじ。

又日蓮が弟子等の中に、なかなか法門知しりたりげに候人々はあしく候げに候。南無妙法蓮華經と申すは法華經の中の肝心、人の中のたましい神のごとし。此れにものをならぶれば、きさきの后ならべて二王をおとことし、乃至きさきの大臣いげ已下内内嫁になひなひとつくがごとし。わざわひの禍みなもと源なり。正法・像法には此の法門をひろめず、余經を失はじがためなり。今、末法に入りぬれば余經も法華經も詮せんなし。但南無妙法蓮華經なるべし。かう申し出だして候もわたくしの計らひにはあらず。釈迦・多宝・十方の諸仏・地涌千界の御計らひなり。此の南無妙法蓮華經に余事を交まじへば、ゆゝしき僻ひが事なり。日出でぬればとぼし灯びせん詮なし。雨のふるに露なみどりごにのせんかあるべき。嬰兒に乳より外のものをやしなうべきか。良薬に又薬を加へぬる事なし。此の女人はな為となけれども、自然に此の義にあたりてしを尊せぬるなり。たう尊としたうとし。恐々謹言。

弘安元年四月一日

日 蓮 花 押

上野殿御返事